



- 日時：平成28年8月14日（日） ●会場：大阪府鍼灸師会館 3階
- 講師：日本鍼灸研究会代表 篠原 孝市 先生

◆はじめに

『明堂（めいどう）』というのは経穴の本である。皆さんがご存じて、江戸時代以来一番有名な経穴の本は、『十四經發揮（じゅうしけいはつき）』（1341年）であろう。これは経絡と経穴に関する本である。これに対して1300年ほど古いと思われる経穴書が、『明堂』という本である。『素問』や『靈樞（れいすう）』に対して『難經（なんぎょう）』があるが、この『難經』と対置されるべき本が『明堂』である。

『素問』『靈樞（れいすう）』『明堂』、それから『史記』の「扁鵲倉公伝（へんじやくそうこうでん）」の向こう側に何かあるかということ、私の勝手な解釈ではあるが、その向こう側には現代医学があると思う。伝統医学から現代医学へ通り抜けるには、『難經』の陰陽五行説の世界というのが邪魔なのである。そして『難經』以降の世界も邪魔なのである。『素問』『靈樞』『史記』の扁鵲倉公伝というのは、その向こう側に行くと現代医学と握手出来るという部分がかなり有った、という風に私は思っている。

◆現存の中国古医書から見た『明堂』

『素問』や『鍼經（九卷）』（今の『靈樞』）というのは、今から2000年以上前に出てきたものである。おそらく前漢（前206～後8年）の頃だと思ふ。後漢（25～220年）の時代に『素問』や『靈樞』に続いて、『明堂』『難經』『傷寒雜病論（しょうかんざつびょうろん）』という書物が出てくる。『傷寒雜病論』は、『素問』や『靈樞』から直接出てきたものではない。『素問』や『靈樞』からは、『明堂』と『難經』という本が出てきた。

『明堂』と『難經』というのは、非常に性格の違ったものである。経絡経穴のことで言えば、『素問』や『靈樞（れいすう）』に書いてあるのは経穴の方が少ない。主に経脈が中心に書かれている。現在は『素問』『靈樞』と鍼灸書を分けるが、『素問』『靈樞』と鍼灸書が完全に分かれるのは宋代（北宋960～1126年、南宋1127～1279年）以降である。隋・唐代（隋581～617年、唐618～907年）までは、『素問』『靈樞』は鍼灸書であった。

『素問』『靈樞（れいすう）』と『明堂』『難經』が大きく違うのは、『素問』『靈樞』が経脈を中心にしたものであったのに対して、『明堂』は純然たる経脈の中の、あるいは特定の部位（頭、胴体）の中でどういう穴が有るかということを書いた、という事である。『明堂』は、穴を経脈と部位別に分裂したという点で全然違うものである。

『難經』は、『素問』『靈樞（れいすう）』に書かれている色んなものを振り捨てた。残ったものは「五蔵（五臓）」と「経脈」である。経脈の上に奇経というものを作り上げて、解剖学的な所見の「腸胃（ちょうい）」をくっつけた。つぼを全部運用するのでは無く、手足の五要穴を重要視するという点で、『素問』『靈樞』とは違っている。

『明堂』は349穴、大体1年間の日数に近い数に合わせて、すべてのつぼの場所と、そのつぼの主治、禁鍼、禁灸と鍼の刺入する深さ、灸の壮数をまとめて書いたものである。

『難經』というのは、それとは全く性格を異にして、五蔵（五臓）論的に、あるいは五行論的に手足の五要穴を使って経脈を運用する。それによって治療するものである。『難經』と『明堂』は相当違った方向に行く。『難經』と『明堂』がその後の医学の方向性を確立したと言っていいと思う。

ただ『明堂』というのはすぐに無くなる。三国時代（220～280年）に『甲乙經（こういつきょう）』という本が出来る。『素問』『鍼經（九卷）』（靈樞）、『明堂孔穴鍼灸知要（めいどうこうけつしんきゅうちよう）』という本から取ったものを入れて、『甲乙經』が出来上がる。『甲乙經』の著者にしてみれば、『明堂』というものの路線こそが『素問』『靈樞』の後を受けたもの、という認識があったと思う。（実は『難經』も引用されているので一概にはそう言えないのでは有るが）

片方では『難經』という本は、脈診の方の『脈經（みやくきょう）』に影響を与える。

六朝時代というのがあり、後漢（25～220年）が崩壊して、後漢の後を受けた魏（ぎ）も崩壊して、いわゆる混乱した時代となる。北方民族が攻めてきて、漢民族は揚子江の北から南に逃げる。北の方は北方民族の支配、南の方にとりあえず漢民族の王朝を作った。医学でいえばあるいは他の文化でいえば、受け継ぐ人も無ければ文献も無いという状態になった。

『素問』や『靈樞』や『難經』などがよくわからないものになったのは中国が南に移ってしまったという事が決定的だと思う。何も無くなったのである。

六朝時代に古い時代のものは、ほぼ終わったといっても良い。現在『素問』『鍼經（九卷）』（靈樞）と『甲乙經』と『難經』が、細々と残るのみである。

『明堂』という本の主体は無くなっている。『明堂』という名前の経穴書は400年代にも出来るが、大事なのは隋・唐時代（隋581～617年、唐618～907年）になってからである。やっと六朝時代の混乱を修復して、黄河と揚子江の間（中原：ちゅうげん）に文化が戻ってくる。王朝が一応確立して地域社会が安定した時に、初めてそこで医学的な文化も問題になる。皆が好き勝手なことをいっぱい言うので、経穴の学というのは有っても混乱していた。鍼灸の体系的なものが何も無くなって、ここを使えばあそこに効くというような話ばかりになってしまった。しかも決定的だったのは鍼の文化が無くなっていた。お灸の文化はかろうじて残っていたが、鍼の文化は消えてしまって、お灸と経穴しか鍼灸で残っていなかった。しかしまあ経穴で何とかしなければいけないという事で、古い『明堂』を引っ張り出してきて作ったのが600年代初期の『黄帝明堂經三卷』楊玄操（ようげんそう）撰注である。この本は今に残っていない。楊玄操という唐の初期の人は、『明堂』と『難經』に注を付けた。これは非常に重要なことである。

600年代前半～半ば？に書かれた孫思邈（そんしぱく）著、『千金方（せんきんぼう）』『千金翼方（せんきんよくほう）』も『明堂』の流れのものである。

600年代後半に楊上善（ようじょうぜん）という人が、『黄帝内經明堂類成（こうていだいけい めいどうるいせい）』という本を書いている。十三巻の内、第一巻（手太陰、日本に残っていた）のみ現存する。楊上善はこの本の他に、『黄帝内經太素（こうていだいけいたいそ）』という本を書いている。この本は、『素問』『靈樞（れいすう）』を合わせて注をつけたものである。

752年に書かれた『外臺秘要方（げだいひようほう）』の三十九巻が『甲乙經』の異本と言われている。

ここまでが、中国で今残っている書物の中に出ている『明堂』ということになる。

日本では丹波康頼（たんばやすより）が、984年に『醫心方（いしんぼう）』の第二巻の中に、楊上善『黄帝内經明堂類成』を抜粋している。膨大な引用がされているので、楊上善著の大略がわかる。（現存する楊上善の『黄帝内經明堂類成』は十三巻のうち第一巻だけである）

『甲乙經』『千金方』『千金翼方』、ここに引かれている『明堂』の文章は、手足は経脈別、胴体と頭は部位別に編集している。しかし唐代（618～907年）に出た楊上善の『黄帝内經明堂類成』や、『外臺秘要方（げだいひようほう）』はすべて十二経脈別に分類している。これをみると、古い『明堂』の形態がどんなものであったかがよくわからない。

北宋時代（960～1126年）の段階で、『明堂』には二種類のテキストがあったという事がわかる。一つは楊上善注『黄帝内經明堂類成』十三巻、もう一つはおそらくは楊玄操（ようげんそう）の注をつけたものと同じ三巻本の『黄帝明堂經』である。

1027年に王惟一（おういつ）撰『銅人腧穴鍼灸図經（どうじんしゅけつしんきゅうずけい）』が出ると、古い経穴書が不要となった。この本は三巻本で、上巻は全部の経穴を十二経脈別に分けるという作業をしている。中巻は頭や胸、背中など部位別に経穴を並べている。下巻では、手足の十二経脈別に経穴を並べてある。

全ての経穴を経脈別にしたのは、752年の『外臺秘要方（げだいひようほう）』、そして『銅人腧穴鍼灸図經』の上巻、そして1118年の『聖濟總録（せいさいそうろく）』である。今は誰でも経穴というのは経脈別であるのが当たり前だと思っているが、そうでは無い。やっとすべての経穴が、一応現在に近い形で経脈別となるのが、1118年の『聖濟總録』からである。

しかし、その反動で1180～1195年に王執中（おうしつちゅう）が著した『針灸資生經（しんきゅうしせいきょう）』は、手足が経脈別、胴体は部位別に経穴を配当してある。（これは『甲乙經』『千金方』『千金翼方』と同じである）

この手足が経脈別、胴体は部位別に経穴を配当するというやり方がすべて無くなるのが、滑伯仁の『十四経發揮（じゅうしけいはつき）』（1341年）である。すべての経穴が、経脈に所属しているという風になったのは、700年ぐらい前のこの本からで、ここから今の経穴学が出来た。そうすると、ここで議論が起こる。元々すべての経脈の上に経穴があったと考える人と、古くは胴体の部分は部位別で、手足は経脈別だったと考える人、この二つの見識のいずれが正しいかという議論が起こるのである。

* 西暦は角川書店刊『角川新字源』による

（素問勉強会世話人 東大阪地域 松本 政己）